

勅使を迎える青楓～〈遠侍〉勅使の間

二条城は、慶長8年(1603)に徳川家康(1542-1616)によって、御所の南西、裏鬼門に位置するこの場所に建てられました。寛永3年(1626)、後水尾天皇(1596-1680)の行幸に際して大改修が行われ、幕末まで将軍上洛時の宿泊所、また朝廷との交渉の拠点とされました。

二の丸御殿の勅使の間は、朝廷のために設えられた部屋です。今ある城郭のうち、勅使の間が現存するのは、二条城だけ。今回は、勅使の間をご紹介します。この部屋に描かれた青楓の障壁画をご覧ください。

勅使の間が迎えた人

勅使は、天皇の代理人として、その意思を伝える使いで、二の丸御殿の中に特別に部屋が用意されて丁重に迎えられました。勅使の間の上段に座したと考えられています。

江戸時代の初め頃、朝廷をいかに協調させるかが江戸幕府の課題の一つでした。朝廷と融和するべく、徳川和子(1607-78)の人内や寛永行幸が行われましたが、寛永4年(1627)に後水尾天皇が幕府に伺うことなく大徳寺などの僧に対して紫衣の着用を許したことを発端に、幕府と朝廷の対立が深まります。いわゆる紫衣事件です。悪化していた関係を改善すべく、寛永11年(1634)、三代家光(1604-51)が、30万の大軍を率いて上洛。二条城に入った家光の元に、上洛を祝う挨拶などのために勅使が度々、遣わされました。以後、しばらく将軍の上洛は、ありませんでした。幕末の動乱の中、文久3年(1863)に14代将軍徳川家茂(1846-66)が、229年ぶりに上洛して二条城に入ると、勅使は、家茂の元へと、また慶応2年(1866)二条城で行われた15代将軍徳川慶喜(1837-1913)の將軍宣下の時に遣わされました。

大政奉還がされると、明治17年(1884)に二条城は離宮になります。嘉仁皇太子(1879-1926)(後の大正天皇)は、京都へ行啓の際に、二条城の本丸御殿を宿泊所にしました。現在の京都新聞の前身である「日出新聞」は、二の丸御殿の勅使の間で、嘉仁皇太子への拝謁が明治33年(1900)5月27日と明治40年6月7日に行われたことを報じています。

勅使の間は、朝廷の使いの勅使を迎えるための部屋から、皇太子への拝謁の場へと変化したのです。

勅使の間の設え

二の丸御殿の控えの場である〈遠侍〉の部屋内、南西側には虎が描かれた威圧的な雰囲気のある部屋がある一方、北東側には植物が描かれた穏やかな雰囲気の部屋があります。勅使の間は、北東側の一角に位置し、上段と下段の二間を構えています。江戸時代は、「殿上の間」「遠侍 上段 下段」とも呼ばれていました。

勅使の間は、上段に主である将軍が座することが想定されていないため、御殿内の他の対面所と違う設えになっています。たとえば、他の対面所は、上段むかって左側に主の書斎としての意味をもつ付書院が設けられているのに対し、ここでは付書院が設けられていません。また、上段むかって右側に、黒漆塗でなく透漆塗の木目を表した檜材が用いられるなどしています。

勅使の間の障壁画は、楓、桃、檜が中心に描かれ、部屋全体が春

から夏を彩る植物で統一されています。勅使が背にする大床と帳台襖に描かれているのは、葉先がほんのりと赤い青楓。この青楓の種類は、「野村」という名前で知られています。春に緑色の葉を芽吹いて、秋に赤くなるものと違い、春に赤色の葉を芽吹き、夏に緑色に変化して、秋に再び赤色に転じます。勅使の間の青楓は、枝幹に鳥を遊ばせつつ夏の到来を知らせているのです。

大床の青楓は、州浜の近くまで地面が描かれ、その木立は、うねるように金雲の上まで伸び広がります。遠柵には岩と躑躅が、天袋には梅、山吹、桜、牡丹が描かれており、天袋の裏には、普段、見えないながらも、蕈、たんぽぽ、ほうこ草が描かれています。帳台襖の青楓は、前に岩、後ろに州浜を配し、金雲の中にいったん姿を消し、長押上で再び姿を現します。下段の南側に描かれる檜も、同じように遥かな高さを感じさせます。一方、北面の腰障子には、このような低木の桃が描かれており、南北で対照的な構成になっています。

青楓や檜の天井を突き抜けるような高さや金雲の表現、金色の地面に食い込む幹の表現や曲線の使い方にみられるように、勅使の間の障壁画は、桃山時代後期の画風を残しています。作者は、狩野甚之丞(1583-1628)と考えられています。

消えた鳥と蕈

勅使の間を飾っていた原画のうち、下段の障壁画の南面2面は、金地や彩色が鮮やかなことから、描き直されたものであるとされてきました。しかし、將軍家茂の上洛に随行した輿絵師の板谷広春(1833-82)による二の丸御殿の障壁画の写し(縮小した模写)が、近年、発見されたことで、それが裏付けられたのです。写しには、檜の枝先の下に七羽の鳥と蕈が描かれています。二条城が離宮になり、大修理が行われた明治18年から翌年にかけて、この部分が描き直されたことが『二条離宮記』(宮内庁書陵部蔵)からわかります。この修理の際、七羽の鳥と蕈が省略されたものに変えられたと考えられます。七羽の鳥と蕈が描かれた原画は現存していないので、二の丸御殿の勅使の間でご覧になれる模写画にも七羽の鳥と蕈が描かれていません。しかし、日々すすむ研究によって、忘れ去られた二の丸御殿の本当の姿を再び知ることができたのです。

青楓が季節によって葉の色を変化させるように、時代によって迎える人や、障壁画に描かれているものが変化した勅使の間。青楓は、時の移り変わりをみつめていることでしょう。

降矢淳子(元離宮二条城事務所 学芸員)